

夏の感染症

大人も

3大夏カゼにご用心

夏本番、炎天下での仕事や運動、食欲不振や寝不足などの不規則な生活が続くと、免疫力が低下し、さまざまな感染症を引き起こす原因になります。

今回は従来、子どもの病気だと思われていた3つの病気について解説します。大人が感染する例も報告されているので、家族で予防に努めるようにしましょう。

プール熱いんとうけつまくねつ (咽頭結膜熱)

原因 主にアデノウイルス

潜伏期間 5～7日間

39～40℃の高熱やのどの痛み、目の充血などの症状を引き起こします。死亡例も報告されており、重症化するケースがあるので油断できません。プールの水を介して流行することが多く「プール熱」とも呼ばれますが、**飛沫感染や手指を介した接触感染もするので、通常の生活でも感染**することがあります。なお、プール熱は学校保健安全法で、第二種伝染病に指定されていて、解熱から2日を経過するまでは出席停止とされています。感染予防の観点から、プールには症状が治まってから1週間ぐらいは入らない方がよいでしょう。

監修 社会福祉法人 横浜市社会事業協会 なごみクリニック院長
武井 智昭

ヘルパンギーナ

原因 コクサッキーウイルスA群など

潜伏期間 2～4日間

乳幼児がかかりやすい夏カゼの代表的なもので、**接触感染を含む糞口感染や飛沫感染が感染経路**となっています。2～4日の潜伏期間を経過して、突然の高熱のほか、上あごやのどの上に水疱ができたりします。5歳未満の子どもがほとんどですが、子どもから大人に感染することもあり、まれに熱性けいれんや脱水症など重症化することもあります。

手足口病

原因 コクサッキーウイルスA群など

潜伏期間 3～4日間

口の中や手のひら、足の裏に水疱性の発疹が出て、発症者の約3分の1に発熱があります。発症者の90%前後が5歳以下の乳幼児となっています。ほとんどは、数日間で治りますが、まれに、髄膜炎、小脳失調症、脳炎など中枢神経系合併症を生じることがあります。**飛沫感染、接触感染が主な感染経路**ですので、乳幼児が集団生活している保育施設や幼稚園などでは、とくに注意が必要です。